

左千夫と出会った男たち

山武市歴史民俗資料館企画展

「左千夫を看取った男 芬」

9月17日(土)～平成29年3月26日(日)

左千夫の甥、芬

伊藤芬は明治11年(1878)3月26日殿台村18番屋敷に父である伊藤広太郎(左千夫の兄)と母つねとの間に幸次郎(左千夫)の甥として生まれました。

年齢は14歳差で末弟の幸次郎にとつては弟ができたようで大変喜んでいました。幸次郎自身も義理の姉つねにかわいがられ、日ごろから幸次郎の事を「サチウ、サチウ」



左千夫(中央)と芬(左端)

と呼んでいました。左千夫のペンネームの名付け親かもしれませんね(数ある説のひとつです)。

幸次郎は明治22年(1889)27歳で本所茅場町(現在のJ.R総武線錦糸町駅のあたり)に牛乳搾取業を開業します。

写真(左上)は明治41年、芬30歳の時です。早くから叔父幸次郎を頼り牧場の手伝いをしていたことが伺えます。

身近にいた親族でしたから幸次郎をはじめ子どもたちも信頼していたようです。

左千夫の最期

芬は幸次郎の終焉を次のように語っています。

大正2年7月29日に甥の芬家を訪ね、風呂に入り、台所をのぞき「うまそうなナスじゃ、しぎやきを作ってごちそうせんか」と芬の妻さえにねだったそうです。『野菊の墓』にもナスが出てきます。幸次郎の好物であったことが分かります。「ナスのしぎやき」とはナスの味噌田楽の別称です。

芬の家で夕飯をごちそうになり家に帰ってから気分が悪くなり床につき、翌30日に激しい頭痛におそわれ、起きることができず大きないびきをかきはじめました。娘たちは「おとうさん、おとうさん」と何度も何度も声をかけましたが何の返事ありません。脳溢血で49歳と11カ月の生涯を終えました。

芬は叔父幸次郎の葬儀を、幸次郎の妻であるとくを補佐しながら執り行いました。

お墓は大正8年(1919)7月に門人たちの寄付により建立されました。墓誌は葬儀委員長を務めた中村不折によるものです。

芬が幸次郎がかかえていた問題(借金・子どもの将来など)を解決すると共に小説家・歌人左千夫の遺品・遺墨の散失を防ぎ今日、資料館収蔵資料として残してくれた功績は多大なるものです。



亀戸普門院の左千夫の墓

同時開催特別展

「左千夫を誘った男 並根」

茶道・和歌を学んだ友

伊藤並根は天保6年(1835)

に名古屋市西区本重町(現名古屋市西区錦)の常瑞寺に生まれ、嘉永6年(1853)に江戸浅草梅応寺の住職となりましたが、25歳で還俗(一度出家した者が俗人に戻ること)。明治に入り東京府の役人を務めるも退職し、明治21年(1888)に本所区に得生舎と号して牛乳搾取業を開業します。左千夫は明治22年に開業していることから同業者として付き合うようになり、並根から茶道・和歌を学び交流を深めていったことが伺えます。

並根に会わなければ次の「正岡子規」への出会いは無かったはずですから並根との出会いは、左千夫にとって大きな契機であったと思われる。展示で並根の人となりを紹介しています。

山武市歴史民俗資料館では空調機器設置工事のため、臨時休館になる場合がありますので、ご了承ください。

山武市歴史民俗資料館

0475(82)2842